

2015 年 2 月 26 日「罪についてのささげもの」

＜ 聖書箇所 ＞「ヘブル人への手紙 5 章 1 節～6 節」

大祭司なるものはすべて、人間の中から選ばれて、罪のために供え物といけにえとをささげるように、人々のために神に仕える役に任じられた者である。彼は自分自身、弱さを身に負うているので、無知な迷っている人々を、思いやることができると共に、その弱さのゆえに、民のためだけではなく自分自身のためにも、罪についてささげものをしなければならないのである。かつ、だれもこの榮譽ある務を自分で得るのではなく、アロンの場合のように、神の召しによって受けるのである。同様に、キリストもまた、大祭司の榮譽を自分で得たのではなく、

「あなたこそは、わたしの子。

きょう、わたしはあなたを生んだ」

と言われたかたから、お受けになったのである。また、ほかの箇所でこう言われている、

「あなたこそは、永遠に、

メルキゼデクに等しい祭司である」。

＜ 説教抜粋 ＞「罪についてのささげもの」

今日の説教の題名は「罪についてのささげもの」です。聖書の拝読箇所は、ヘブル人への手紙 5 章 1 節～6 節です。ヘブル人への手紙は、ヘブライ人を対象とした書簡であると考えられます。つまり、ユダヤ教徒を対象とした書簡ということです。

「大祭司なるものはすべて、人間の中から選ばれて、罪のために供え物といけにえとをささげるように、人々のために神に仕える役に任じられた者である。」。ここには、大祭司という言葉があります。祭司は、神と人を繋ぐ、執り成しの役目の人のことを指しています。

キリスト教では、神父さんや牧師さんという役職がありますが、ユダヤ教では祭司もしくは大祭司という名前になります。人間が罪を犯した時、贖罪のためのささげものをしますが、その際、ささげものを一旦受け取り、神の御前に供えていく役割を祭司は担当します。

ところが、大祭司といえども人間であることに変わりはありません。「彼は自分自身、弱さを身に負うているので、無知な迷っている人々を、思いやることができると共に、その弱さのゆえに、民のためだけではなく自分自身のためにも、罪についてささげものをしなければならないのである。」。

大祭司は、あくまでも人びとのなかから選ばれた存在です。それでは、具体的にどのような

な人が大祭司となるべきでしょうか。仮に、大祭司が悪徳商人のような人だったらどうでしょうか。もしくは、とても傲慢で尊大な人だったらどうでしょうか。もしそうであれば、有難味は半減してしまうかもしれません。

逆に、大祭司がとても謙遜であったとすればどうでしょうか。もしそうであれば、人びとは、救いをより強く感じるに違いありません。「かつ、だれもこの栄誉ある務を自分で得るのではなく、アロンの場合のように、神の召しによって受けるのである。」。

大祭司という立場は、自分になりたいくてなるものではありません。むしろ、神様の信任によって立てられるべき存在であります。「同様に、キリストもまた、大祭司の栄誉を自分で得たのではなく、「あなたこそは、わたしの子。きょう、わたしはあなたを生んだ」と言われたかたから、お受けになったのである。」。

ここではじめてキリストという言葉が出てきます。メシヤという存在も、神様の召しによって立てられた存在であります。「また、ほかの箇所でもこう言われている、「あなたこそは、永遠に、メルキゼデクに等しい祭司である」。

メルキゼデクという人は、聖書には少ししか書かれていませんが、イスラエル民族にとっては重要な場面で描かれています。アブラハムが諸国の王たちを打ち破り、そののちにサレムの王メルキゼデクに十分の一を捧げ、さらには、彼からパンと葡萄酒の祝福を受けるのです。

「サレム」は「平和」を意味します。ですから、「サレムの王」は「平和の王」であります。一般的には、サレムの王メルキゼデクは、イエスの予型として解釈されます。ヘブル人への手紙の著者は、このメルキゼデクとイエス様を重ね合わせているようです。私たちは、真の父母という存在をどのように考えるべきでしょうか。

真の父母は人類の父母であり、同時に、再臨のメシヤでもあります。真の父母は、私たちの罪をぬぐうために、尽力されてきました。今日の説教の題名は、「罪についてのささげもの」です。贖罪によってもたらされる解放にどれほどの価値を見いだすことができるのかを、私たちは再確認しなければなりません。